

ほうおんこう
報恩講

■ 楽曲データ

歌詞：藪田義雄 作詞

楽曲：小松清 作曲

発表：東本願寺 1962年

初演：1962年11月26日

初出：—

管理番号：M0046

■ 創作の経緯

東本願寺の委嘱により創作された。

■ 校訂報告

校訂譜：『聖歌・讃歌集』第3巻収録

底資料：『佛教讃歌2』 真宗大谷派 1966年

比較資料：—

校訂の詳細：特記事項なし

■ 解説

◆ 内容について

全編を通し、率直な語り口で、親鸞聖人への思慕の念が歌われます。聖人のご苦勞を偲び、お徳を讃えるこの詩は、題名ともなった「報恩講」の意味を、端的に説き明かしています。

音楽的にみると、この作品は、歌い出しは力強く、曲が進むにつれて沈静するという構成になっています。特に、曲の結びである「その遥けさ」の部分は、直前のフォルテ（強く）から一転してメゾピアノ（少し弱く）になります。このような終わり方に、物足りなさを覚える方もいらっしゃるかもしれません。それだけに、この最後の1行の受け止めが、曲のまとめ方を決定づけるといえそうです。

例えば、この1行を、作詞者のさまざまな思い——親鸞聖人を心の拠りどころとしてお慕いする気持ちや、深い感動、心震えるような喜びなどが、ぎゅっと凝縮されたものと、とらえることもできるでしょう。皆さんはどのように思われるでしょうか。

◆ 作詞者・作曲者について

作詞は、詩人の藪田義雄（1902～1984）。10代で北原白秋の門下に入り、詩作に励みました。藪田の詩による楽曲は数多く、仏教讃歌では、下総皖一作曲の《いのち》や、平井康三郎作曲の《親鸞聖人御誕生の歌》などが広く知られています。

作曲は、小松清（1899～1975）。《四弘誓願》の作曲者として、ご存知の方も多いでしょう。フランス文学者としてキャリアを積む一方で、作曲家の長兄・耕輔（1884～1966）や次兄・平五郎（1896～1953）から影響を受け、作曲や音楽評論も行いました。この兄弟は仏教音楽とのかかわりが深く、三人で五十曲ほどの仏教讃歌を遺しています。

◆練習のヒント

- ①曲想の指示として、「大きく遙けく」とあります。この曲では2、3小節ごとにブレス（息継ぎ）の指示がありますが、フレーズは息継ぎを単位にするのではなく、もっと大きくとらえましょう。
- ②この作品は、前半に高い音域が集まっています。歌うための準備をしっかりと。歌い出しはフォルテ（強く）で、さらにクレッシェンド（だんだん強く）の指示がありますが、カんで突っ張った声にならないように。息をしっかりと流して、フレーズを続けるようにしましょう。
- ③1小節目の「ラ」→「ミ」の跳躍を、ずり上げないようにしましょう。また、2小節目1拍目「ミ」の歌詞「を」は助詞ですので、強くあたってしまわないように。5・6小節目も同じように歌います。
- ④接頭語「み」は、子音「M」の発音を丁寧に、ただし遅れないように。
- ⑤9～14小節は、「シ」の音を中心にメロディーが動きます。音程をうまくまとめ、レガートに歌いましょう。
- ⑥15小節目からは、音量はピアノ（弱く）で、音域も低くなりますが、暗いくぐもった声にならないように。
- ⑦最後の2小節は、すっきりとした発音で、ゆったりと歌いおさめましょう。

◆楽譜について

原曲の四部合唱版のほか、二部合唱版があります。楽譜は『讃歌集 二部合唱』第7巻（本願寺出版社）掲載されています。

解説執筆：山口篤子（本願寺仏教音楽・儀礼研究所〔現・浄土真宗本願寺派総合研究所仏教音楽・儀礼研究室〕研究員）

※本解説は、「メロディーの宝石箱」No. 88（仏教婦人会総連盟機関誌『めぐみ』第216号収録）を加筆・修正のうえ、転載。